

高井一の

中部に活!

インタビュー 高井 一 (東海テレビアナウンサー)

東京大学先端科学技術研究センター所長

西村 幸夫 氏



「まちのドラマ」を読み解くことが まちづくり・都市づくりの原点

文学青年が理系の道へ

高井 ご出身が福岡市で、高校まで福岡で過ごされたと伺っています。都市工学をご専門に、長く日本のさまざまなまちづくりに関わってこられた西村先生ですが、福岡での子供時代の何らかの経験が、まちづくりに関心を持つきっかけとなったのでしょうか。

西村 私が住んでいたところは、商人のまちである博多とは川を挟んで少し文化が違う城下町なの

ですが、戦禍を受けており、親はよく「古いものは何も残っていない」と言っていました。今から考えると、そうではあっても、福岡市は福岡と博多という特色の違うまちを持つ複眼都市として面白いのですが、当時はあまりそんなことを意識せずに過ごしていました。

高井 では、どのようなことに興味を持つお子さんだったのですか。

西村 本を読むのが好きでしたね。中学時代は軟式テニス部に所属し、部活漬けの毎日でしたが、

一方で文学青年でもあって同人誌を作ったりもしていました。先ほど、まちづくりに関わってきたことと子供のころの経験は直接的な関係はないとお話しましたが、この文学青年であったことが、間接的にまちづくりへの関心の扉を開いてくれたとは言えると思います。まちづくりというのは、まず、そのまちの面白さを発見する「まち歩き」が重要ですが、まち歩きは「まちを読む」ことから始まります。このことは実は「本を読む」ことによく似ています。

高井 「まち歩きとは本を読むようなもの」ですか。最初から非常に心惹かれるキーワードが飛び出しましたね。それについてはぜひ具体的にお聞きしていきたいと思いますが、その前に、今のお話からどうしても疑問がひとつ浮かびます。そこをまずお聞かせください。西村先生は東京大学の理科一類に進まれていますね。文学青年であった先生が、どうして理系を選択されたのですか。

西村 当時、高校の先生にも驚かれました。高校時代、校内の文芸誌の編集委員長などもやっており全くの文学青年でしたから。それなのに理系へ進んだ理由は、実は非常に単純なのです。たまたま数学ができたからです。当時の田舎の高校生には、数学ができたら基本的に理系に進むという構図があり、当時の私は違和感なく理系を選択したということです。社会的なことに関心があったので、東大の理科一類の中でいちばん社会に近いところの都市工学を専攻したわけです。

立派な建築群を建てる方向性に違和感を覚えた大学時代

高井 「都市工学」というのは、人が安全、快適に過ごすことのできる都市を構築するための技術を扱う工学だと認識していますが、当時はまだ新しいジャンルの学問だったのではないのでしょうか。

西村 1962年にできた学科です。戦後にでき、基地の問題や再開発などをはじめ都市の中のさまざまな矛盾、社会的な課題を扱うもので、そういうことに対して関心が高い学生が多く、学生運動も非常に激しかった頃に生まれた分野です。

高井 そういえば、西村先生が大学に進学されたのは1970年代に入ったころでしたね。

西村 ええ、安田講堂事件^(※1)の2年後です。入試は再開されていたものの、学内は非常に荒れていました。カリキュラムが崩壊状態で、先生が学生に遠慮している空気に満ち満ちており、どちらかというと自主的にやってくださいという感じでしたね。

高井 そういった中での都市工学とは、どのような方向性のものだったのでしょうか。

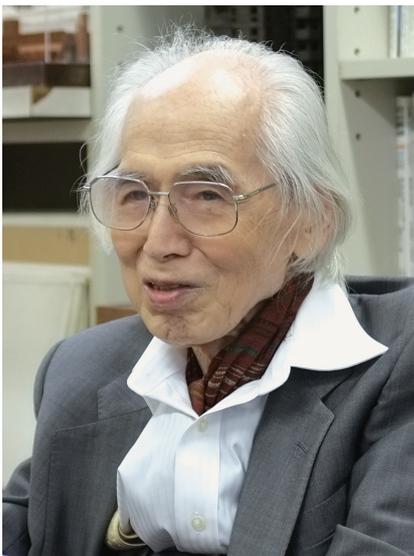
西村 基本的には、過去のものを壊し、何か新しい立派な建物を建てるということです。高度経済成長期ですから、建築家の夢の結実は、まさに立派な建築群を造り上げることだといった学科でした。しかし、私はそれに大きな違和感を持ちました。もう少し具体的に言うなら、地域の成り立ちや土地の記憶、あるいはコミュニティの育まれ方こそが大事だと感じていたので、大きな都市開発を一様に進めていくことに懐疑的でした。私の中には、やはりどこか文系の思想が根強くあったのでしょね。

高井 なるほど。現在、先生が進めておられる、住民主導によるまちづくりの出発点は、すでに学生時代にあったのですね。そういった地域の歴史やありさまなどを大切に考える先生の都市工学の中で、特にご専門とされている「都市デザイン」というのは、どういうものだと考えればよいですか。

西村 そのころの都市デザインというのは、多くの国家プロジェクトを手掛けられた丹下健三先生や、その片腕として活躍され京都国際会館などで

(※1) 1960年代後半、ベトナム戦争が激化の一途をたどり、国内では1970年で期限を迎える日米安全保障条約の自動延長の阻止・廃棄をめざす動きが左翼団体により起き、これに連動するかのよう学生によるベトナム反戦運動・第2次反安保闘争が活発化。時を同じくして、高度経済成長の中、全国の国公立・私立大学にベビーブーム世代が大量に入学し、ときに権威主義的で旧態依然とした大学運営に対して、学生側は授業料値上げ反対・学園民主化などを求め、各大学で全共闘が結成され、またそれに呼応した新左翼の学生が闘争を展開する大学紛争（大学闘争）が起こった。その象徴となったのが、1963年～1969年にかけての東大闘争。入試の中止や、学生約400人と警官約8,500人が攻防戦を繰り広げた「安田講堂事件」が起きた。

知られる大谷幸夫先生などが提唱されていたもので、ようは、建築家グループとして、単体だけを考えるのではなく大きな建築群としての計画、あるいは都市づくりとしての計画をしていこうというものでした。先ほどお話したように、大きな建築群の考え方には違和感を覚えていましたから、当時の都市デザインの考え方に魅かれたというよりも、紛争直後の荒れた大学の中で人間的に信頼できる先生のもとで研究したいという思いが強く、大谷幸夫先生の研究室で学ぶことを選んだのです。つまり、大谷先生がたまたま建築デザイナーであったことから都市デザインを選択したというのが正直なところです。しかし、きっかけはどうか、今でもこの選択は間違っていなかったと強く思っています。2013年1月に亡くなりましたが、私は大谷先生のことを生涯の師だと思っています。



晩年の大谷幸夫先生

高井 大谷先生と接するなかで、何か新しいものが見え始めていったのでしょうか。

西村 大谷先生は、われわれがやっていることに寛容で、いろいろなことを認めてくださったのです。都市の記憶や都市のコミュニティを大事にしたいという視点、そして、その中から出てくる形、例えば広場や集落の持つ価値を再認識するといったこと、あるいは、歴史的な町並みなどを守るべきものは守るということ。こういったことを実現

するために、権力者や技術者が上から大きな絵を描くのではなく、みんなで合意形成していくこと、あるいはボトムアップでつくり上げていくプロセスなどなど。大谷先生がおおらかに見守ってくださった中で、私はそういうところに自然に近寄っていったわけです。当時の時代背景から考えて、他の先生であったならば、それは後ろ向きではないか、歴史の話は歴史家に任せておけばいい、ボトムアップなことは男がやる仕事ではないなどということで、私の考えは最初に却下されていたと思います。

高井 今では考えられません、当時はそういう時代だったのですね。

西村 ええ。都市というのは大きな単位ですから、それを考えるには、チームワークの中で動かないといけないということがありました。当時の時代の勢いを背景にチームワークの中で調査を進めるのなら、「これだ！」という大きなものに向かっていくことを良しとする傾向があったわけです。それに対して、私は、同じチームワークでももう少し謙虚にまちを学ぶことをやろうという考えでしたから、非常に少数派でした。

その地域の人たちが

まちの魅力を自ら探すことに価値がある

高井 つまり、先生のお考えの都市デザインというのは、都市デザインと言いつつも、住んでいる人の暮らしのデザイン、生活空間のデザインといったことに近いのですね。

西村 そうです。そこまで広げるべきだというのが、私なりの都市デザインのありさまで。デザイナーが最初から提案するとか形を押しつけるといったものではなく、おのずとみんなで共有されるようなものを現場の中から見つけて、そういうものを大事にしていくデザイン。つまり、都市づくり、まちづくりのプロセスそのものを大事にするようなデザインがあってもいいのではないかと。それぞれのまちがいちばん輝くようにするためには、それぞれ特色のあることをやらないといけな

いわけです。

高井 今、どのまちも必死で探していることですよね。

西村 ええ。大事なのはそこだと思うのです。それぞれが、「自分たちのまちの個性というのは何かを必死に探す」ことこそが重要で、われわれはそのお手伝いをしたいのです。

しかし、このことを研究として考えると、なかなか難しいですね。なぜなら、毎回、場所によって違うことをやるので、「あなたは何か統一した方法論を持っているのか？」と問われても同じものはありません。

高井 それでは、先生が大事だとおっしゃっているプロセスやアプローチ法に関して何か統一的な手法があるわけではないのですか。

西村 歴史を調べたり、地形を見たり、人の話を聞いたりといった調査の手段としてはあります。しかし、プロセスで最も大事なところ、つまり「ここでがんばらないといけない」という点は、まちによって全く違ったりします。そのまちのいちばんの強みを光らせようとするプロセスは、まさに、それぞれに独自のものがが必要です。研究者としては、それぞれのまちで行った同じことを比較して、ここはこうだと分析すれば割と客観的な論文になります。私は、論文というのは地域に戻さないと意味がないと思っていますから、私が書くレポートは、結果的にはそれぞれのまちで全く違うものになります。

「景観法」という“ムチ”と 「歴史まちづくり法」という“アメ”

高井 さて、来年の2014年には、先生も深く関わられた「景観法」が施行から10年を迎えます。景観法も、そういった時代の流れが大きく後押しして誕生したものなのではないでしょうか。

西村 強く後押ししたのは、戦後、ここまで来た結果として、景観が本当に良くなったのかということに対する反省が出てきたことです。直接的なきっかけとなったのは、東京の国立市のマンショ

ン建設などで争われた景観に関するいくつかの裁判です。事業者が違法スレスレのようなことをやっているときに、どうやったら止められるのかという係争です。各地で、あまりに周りと違う建物が建たないようにするために、事前に事業者と協議する仕組みなどの景観条例のようなものはできていたのですが、そうした仕組みは法的根拠が弱く、お願いするしかなかったわけです。ですから、確信犯は無視します。そうした時に裁判に発展していくわけですが、そのなかで、国立市の裁判が非常に大きな契機になりました。国立市の一件では、裁判官によって判決がすごく揺れたのです。14階建ての高層マンションの建設において、その地域では20m（7階）以上は違法だから認められないという原告である住民側の主張に対し、一審は原告の完全勝訴で、二審は事業者側の完全勝訴、そして最高裁が中間の立場を取るという形になったわけです。もう少し明確なルールを自治体が決めていけばこういうことは起きないとして、国も立法化を急いだのです。つまり、景観法とは、自治体が景観行政を進める時の法的根拠の下支えとしての法律なのです。

高井 景観法が施行されて、景観形成に何か変化は起こりましたか。

西村 いちばん大きな変化は意識変化でしょうね。それまでは、景観というのは主観の問題であり、行政がコントロールするのは適切でないという意識が強かったのです。裁判所でも、そうした判決が多く出ていました。高さ、容積率、建蔽率などは数字で表せるけれど、和風、洋風、デザイン、色、調和といった好みの問題には行政が口を出すべきではないと考えられていたわけです。しかし、良好な景観というのは地域にとっても国にとっても財産であり、ルールを決めて規制することは合法的だということを法律の中できちんとうたったことで、意識が大きく変わりました。

高井 例えば海外では、赤い屋根がずっと続いていたたり、白い家がそろっていたりという景観があらこちらにあり、特にヨーロッパでは街並みが統一されていますよね。住んでいる人にとっては

不便もあるでしょうが、守るための法律や規制がそれぞれあるのでしょうか。日本の景観法は、どういったことがポイントとなっているのでしょうか。

西村 海外では、非常に細かくルールが決まっているとあります。日本の場合は、よほど古い建物がたくさんあるような町は別ですが、そこまで全部そろえるというのは難しいので、周りにそぐわないようなものがつくられたりすることを回避できるようにしようというのが景観法の大きなポイントです。ネガティブチェックに関しては、かなりきちんと規制できるようになっています。

高井 その後、2008年には「歴史まちづくり法」も誕生しました。景観法と歴史まちづくり法とはどのような違いがあるのでしょうか。

西村 基本的に、景観法というのは自治体が規制をする時に後ろからバックアップするもので、景観条例だけでは対処できないものに対して規制の「ムチ」を強めるものです。ただ、景観法ができた時期が、地方分権を進めようという時期と重なり、それが法律の制定に大きな影響を与えました。例えば、各地で景観が大事だと言うのであれば、各地方自治体がきちんと計画を立ててチェックする仕組みを義務化することも考えられますが、それは地方分権に反するというのでそういう法律のつくり方ができませんでした。

高井 それはどうしてですか。

西村 そうすると、国が地方自治体の仕事を増やすことになるからです。やりたいと思っているところもそうでないところも一律にやれということになりますからね。しかも、地方自治体の固有の事務を、国が一本の法律で縛っていいのかということがあり、景観法は、やりたいというところはやればいいし、やりたくないところはやらなくてもいいという、各自治体の姿勢に任せるという法律として生まれました。先ほどお話したように、規制としてはきちんとした効力を発揮しますが、その規制の中身については各自治体が決めていいということになっています。それまでの国の法律は、メニューを与えてその中から選びなさいというのが通常でしたが、景観法は、それぞれ地域に

よって状況が違うから、そこでいちばんやりやすい方法でメニューをつくっていいとなっているのです。

高井 それは知りませんでした。景観法とはそういうものなのですね。

西村 ですから、やる気がある自治体には大きな後ろ盾になりますが、やる気がないところには何にもならないわけです。もちろん、景観が大事だと思っている人は、やる気のない自治体にも住んでいるわけです。行政が眠っているとそういう人たちは何も起こせないのか、あるいは景観がどんどん悪化してもやむを得ないのかというと、やはり、そこには何らかの施策を講じないといけない。ムチだけだと、ムチを使う気になっているところはいいけれど、使う気がないところでは意味がない。一方では「アメ」を配置しようということになる。「これをやればこのくらいのサポートをします」というものがあれば、やる気がないところも取り組む意思が生まれるかもしれない。それが、歴史まちづくり法なのです。歴史まちづくり法には規制は全くありません。アメだけの法律です。

高井 補助金制度とはどう違うのでしょうか。

西村 今までの補助金制度というのは、国が補助メニューを決めてやりたいところに手を挙げさせ、その中からやるところを決めるというもの。もっと言うと、お金が出ているからには口も出すという形になっており、国が地方自治に介入する根拠を与えていたわけです。それが地方分権にはそぐわないということで、そういう仕組みを何とかやめさせようということが同時に進んでいたわけです。そういった中で生まれた歴史まちづくり法は、それぞれの自治体にまず自分たちがつくった計画があって、その計画に基づいてひとつずつ進めていこうとする時に、さまざまな補助金の中から合ったものを使いやすくすることをメインにつくられたものです。この歴史まちづくり法（アメ）と景観法（ムチ）とで進めましょうというのが、現在のところの日本の景観行政です。この2つの法律ができたことで、各地でのまちづくりのお手伝いも非常にやりやすくなりました。

歴史まちづくり法を活用し、 まちの魅力を光らせた高山

高井 景観法や歴史まちづくり法をうまく生かしてまちづくりを成功させた具体例をお聞かせいただけませんか。

西村 例えば、中部地方の例でお話すると、歴史まちづくり法の認定は国が行うのですが、中部では最初に飛騨高山（岐阜県高山市）が歴史都市として認定されました。飛騨高山には私もずっと関わっていますが、歴史まちづくり法を生かして再生されたのが、高山の観光名所でもある古い町並みの周辺に位置し、市内観光の拠点として便利な場所にある「飛騨高山まちの博物館」です。もともとは、かつての高山市郷土館の隣に鉄筋コンクリートのビルがありましたが、そこを歴史まちづくり法を活用した事業で買い取り、その土地も含めて大きく拡充したものです。高山の歴史や伝統をはじめとするまちのさまざまな魅力に触れられる非常に大きな展示施設をつくり、外観も高山の古い町並みと調和した博物館として2011年にオープンしました。この博物館は、観光客に好評である前に、環境が良くなったということで地域の人々に好意的に受け入れられ、結果的に人の流れが変わったりもしました。歴史まちづくり法は、基本的にはその地域の歴史をベースにした魅力を光らせるものであり、それにより地域の人たちが誇りを持ってそこに住むことが重要です。そうなることで、結果的に観光客を呼び、経済的に潤うということへとつながっていくのです。

まちの方向性を明確に打ち出し、 市民がそれに呼応する犬山

高井 確か、電線地中化が図られてまちの見え方が一気に変わった犬山（愛知県犬山市）にも先生が関わっておられるのですよね。

西村 犬山の電線地中化に関しては国土交通省の別の補助金でやったもので、犬山のまちづくりの本題はこれからですね。犬山の場合、これまでの

プロセスの中で特筆すべきは、中心地区のメイン道路を16mに拡幅するのをやめるといふ、地元が真っ二つに分かれるような決断を前の市長の時にやられたことです。それは一つの政治判断だったわけですが、これによって「わがまちはこういう道を歩むんだ」ということがまちのビジョンとして非常に明確に出たわけです。そのことに大きな意味があり、それ以来、住んでいる人が「それならこういうことができるのではないか」と考えるようになり、その通りにはお店がたくさん増えました。しかも、非常にきれいになっています。その結果、今までは犬山城に行って終わりという観光の流れだったものが、街中まで人が流れるようになっています。

高井 確かに、観光客がまち歩きをするようになりましたね。

西村 おそらく20軒以上のお店が出ているのではないのでしょうか。必ずしも歴史まちづくり法だけを活用する必要はありませんが、今、犬山では、大手門のところにある保健センターのビルを何とかすることや体育館を動かしてその前の広場をきれいにする計画などが進んでいます。歴史まちづくり法はそういうところに使えるのです。



犬山市の本町通り。遠くに犬山城が見える。その左手前に課題となっている福祉会館のビルが見える。

どのまちにも必ず物語はある。 それをクローズアップしていくことの 重要性

高井 まずは、住んでいる人が、多少不便でもこ

のまちの価値をとどめたい、この方向で進むまちで何らかの活動したいと、わがまちに魅力を感じることが大事なのでしょうね。

飛騨高山や犬山といった、全国の中でも独特の歴史を持ち、かつ、こぢんまりとしたまちはやりやすいのではないかと思うのですが、もう少しいろいろな人が流入してくる都市では進め方に難しさが出てくるのではないのでしょうか。

西村 おっしゃる通りです。そこで今、私がやろうとしているのは、都市にはどんなまちにもそれなりの物語がありますから、その物語をクローズアップさせていく作業です。とても面白い物語があってみんなが共有できることがわかれば、まちを見る目というか自分のまちを感じる目が違ってきます。これまでは、文化財がないといけなとか、町並みを中心に考えなければいけないとか、明確な手がかりがないとうまく進められませんでした。そうではないところでも、まちの見方を考え、示すことで面白いストーリーを描くことができると思います。それを次のステップとして取り組み始めました。

高井 今、ここは面白そうだと感じておられるところはありますか。

西村 いろいろとありますが、そのひとつは岐阜（岐阜県岐阜市）ですね。岐阜のまちを面白いと思う人は少ないようですが、私はとても面白いと感じています。岐阜というのは少し変わったまちなのです。まず、JR岐阜駅を出て、どちらを向いて歩いて行ったらいいのかわからないところに、岐阜の物語のひとつのポイントがあるのです。岐阜というのは、もともとは齊藤道三に始まる歴史あるまちで、織田信長の時代に発展したところです。しかし、城下町であった多くの都市と異なり、岐阜は当時の城下町に役所がありません。役所は、岐阜のまち全体から見ると端っこにあります。これひとつだけでは手がかりがつかみにくいのですが、「それはなぜか？」と考えると面白いことがわかってきます。岐阜のまちは、北から南へ順番にできあがったまちなのです。北の方の古い部分は16世紀半ばにできあがっており、齊藤道三のこ



提供：公益財団法人岐阜観光コンベンション協会

ろには川に向かって東西にまちが開かれ、それが徐々に南に延びていったのです。そして、織田信長の時代に岐阜城を中心とした城下町が築かれて発展しますが、関ヶ原の合戦後には、徳川幕府により岐阜城とともに城下町も壊されます。織田家が持っていたところを、城下町として存続させることを嫌ったのでしょうか。都市として存在したものをいったん消され、南に位置する加納という地域に加納城がつくられ、江戸時代にはそこが政治の中心になったわけです。そして、旧城下町は町人町となりました。

高井 結果的には、現在の岐阜の中心地は、駅北の旧城下町の南側ですよ。

西村 その通りです。明治になった時に、武家屋敷があればそこに学校や役所ができましたが、岐阜は町人町であったため、そこに接して南側に県庁や市役所、裁判所などができました。岐阜は北から南に向かってまちが開かれていったため、北から歩くとよくわかるまちですが、玄関口がまちの南にあるので、逆から歩くことになるためによくわからないまちとなっています。しかし、まちの成り立ちを丹念に読み解いていくと、岐阜というのは普通の城下町よりはるかに長い時間をかけ

て変化しながらつくりあげられたまちで、しかも、関ヶ原の合戦で大きく運命を変えられた“まちのドラマ”があることもよくわかります。

高井 何だか、「面白いまちだな」とがぜん興味がわきますね。

西村 そうでしょう。ただ、大半の人はそういうことを意識せずにまちを歩いているので、なかなか気づきにくい。そこで、もう一度まちの物語を浮かび上がらせると、自分たちのまちの面白さやまちがこれからやるべき課題も見えてくるはずですよ。そして、どんなに戦災があったまちだろうとどんなに古いものがなくなったまちだろうと、そこからこれからのビジョンが描けます。今は、それが普遍的な方法論につながっていくのではないかと思っています。

名古屋の面白さとは？

高井 先生は、冒頭で、「まちづくりというのは、まず、そのまちの面白さを発見する“まち歩き”が重要で、そのまち歩きとは本を読むようなもの」だとおっしゃいました。私は、そこにとても興味をもちましたが、岐阜を例にお話いただいたように、まちの物語を読み解いて分析していくのが先生のまちづくりのアプローチなのですね。そこで、もうひとつ教えていただきたいのは、果たして名古屋というまちには物語を見出せるかどうかについてです。一般に、名古屋は岐阜以上に物語がないまちだと思われていますが、いかがでしょうか。

西村 いえいえ、名古屋というのは非常に面白いまちです。静岡とともに考えると、それがよくわかります。両方とも徳川がつくったまちで、大きな特徴としては都心部にほぼ100mのグリッドが残っており、それがまだ生きているのは日本にはそうはありません。また、城下町の中でも本当に最晩年というか最終的な城下町のスタイルとしてできあがったので、一般的な城下町は攻めにくい工夫として突き当たりがあったりくねったりしていますが、名古屋や静岡にはそれがありません。

高井 戦なき時代につくられた城下町だからですね。

西村 そうです。ですから、名古屋と静岡は非常にシステマチックで明快な都市です。面白いのはそこからで、規模が違ったからかもしれませんが、静岡は今でも城下町の中心が賑わいの中心です。一方、名古屋の場合には、そういったところとは全く違うところに栄などの賑わいの中心ができています。それは、名古屋の方が規模が大きかったので、戦前はシステマチックな構造を軍が活用し、戦後には公共施設が入ったからです。名古屋と静岡は同じように正方形のグリッドが都心のお城のすぐそばにあって、それが生きているという意味では似ているものの、その後の生き方が違う。そういうことを読み解いていくと、非常に面白いなと思うわけです。

高井 では、その素地を生かし、もっと素敵にデザインしようと思うと、どういうふうにしたらよいのでしょうか。

西村 そうですね。日本の中でこれくらい道路が整備されているところはありませんから、そこをうまく生かすというのがひとつの大きなポイントだと思います。素敵なお歩道ネットワークでつながれているまちだとか…。ただ、まだ本気で名古屋のことを考えたことはありませんから（笑）。

まちづくりとは、“発見のプロセス”を経ていくものでもある

高井 「面白さはある。皆でそれを探せ。」ということですね。

西村 私の立場は、あくまで助っ人です。そのまちのことを考えるのは、まちの人たちであるべきです。私たちはそういう人たちを応援して、専門家としての視点からアドバイスをします。非常に大事なものは、“気づき”です。単にそのまちの面白さに気づくだけでなく、はなから無理だとして意識もしていないことにこそ、まちづくりの重要な視点があることにも気づくことです。人は、やれそうにもないことは最初から発想しません。例

えば、「この通りを見てどう感じますか？」というアンケートに対して、だいたい、ゴミが落ちている、自転車の放置が問題だといった、やろうと思えばできることについては意見が出ます。建物や街灯あるいは道幅など、とても自分一人ではできないことについては最初からほとんど考えません。一人ではできなくても、また、短期では無理でも、長期のビジョンに立てば実現できるまちにとって非常に重要なことがいくつもあります。地域の人の意見を聞き出す時、こんなこともやれるのではないかとかというお話をして頭をほぐしていくと、いろいろなことが考えられるようになります。

高井 道路だ、建物だというハードだけではなくて、愛知県の足助のように、ひな祭りの時期にはまちをお雛様の一大テーマパークにしたり、夏には約6,000個のロウソクを足助川の遊歩道に灯す「足助川万灯まつり」を開催したりといった、ソフトのアイデアを注入するようなこともあるわけですね。

西村 その通りです。伝統的な祭りをよく見ると空間の使い方が非常にうまい。“そこが祭りの舞台”となる使い方をしている。例えば、犬山の山車祭りでは山車を回転させるところがクライマックスになりますが、うまくそこを見せ場にしなければ祭りの面白さが伝わりません。実は、道を広げないのもそこに意味があるわけで、クライマックスとなる場所を広げたら迫力も何もありません。演出の素晴らしさをよく見ていくと、まちの形がそういうものを育てているのがわかります。「そういうことが大事ではないですか。」と言うと、まちの人も気づいてくれます。まちづくりとは、本を読み解くようなものであると同時に、まちの人と一緒に“発見のプロセス”をやっていくようなものでもあります。

高井 もう一步踏み込んで、まちづくり・都市づくりを進めるうえでカギとなるのはどういうことですか。

西村 まちの人が、「自分がやった」と思ってくれることです。だれか他人に言われたからやって

いるというのでは長続きしませんからね。私たちの関わりで最も大事なことがまさにそこで、みんなが自分がやったのだと思ってくれるように舞台の仕掛けをすることが、成功のカギを握ります。われわれは、専門家としてお手伝いはするものの、動き出したら自然に消えてもいい存在、むしろ消えた方がいい。そこが、都市デザインと建築デザインの大きな相違点です。建築は、どこまでいっても設計者がいて、この人のデザインだということになりますから。

日本の各地で、新たな可能性への取り組みが始まっている

高井 もう少し広い視野で見て、この日本という国の、国としての景観についてはどのようになっていくといいとお考えですか。

西村 先ほどからお話ししていることと重なりますが、住んでいる人が、例えば、死んでいく時に「このまちで暮らしてよかった」と思えるようなまちを、それぞれが作るのだと思います。ありさまはさまざまで作り方もそれぞれ違うけれど、このまちが故郷で良かった、このまちで暮らしていて良かったと思えるようなまちをつくることです。

高井 一つひとつの事例は全部違うということですね。

西村 むしろ、違わないと意味がないと思います。今、小さな集落でも農業をがんばろうという人たちが増えてきており、過疎集落でも再生の道はあり得ると考えて動いている人たちも増えています。私の研究室の卒業生で、岐阜県の石徹白（いとしろ）というところに移住した人がいます。東京大学で修士まで学んだ彼が何をやっているかということ、田舎町で小水力発電をやっています。それによってまちが自給できる仕組みをつくりたいと。

高井 石徹白というと、岐阜県の中でも豪雪地帯でスキー場しかないようなところですよ。まさに、日本の可能性を大いに感じさせてくれる例ですね。

西村 少し前までは、そういうところにはどうアプローチしていいのかわからなかったのですが、逆にそういう田舎だからこそやれると感じる人たちが出てきて、地元の人たちと一緒に取り組んでいます。

高井 過去を生かすだけでなく、今は過去の結果として寂しい現状があるけれど、だからこそ、そこに未来を見つける取り組みが始まっているということですね。

西村 高山市の上宝町の長倉という集落も面白いですよ。最近、地元の人がとても元気になっています。

高井 その元気の源は何ですか。

西村 長倉には、「万雑（まんぞう）」と呼ばれるタウンミーティングが今でも脈々と生きています。簡単にいうと年一回の寄り合いですが、長倉には山林などのそこに住む人たち共通の資産があって、年一回の寄り合いでは、明治時代からの帳面を見ていけば「万雑ルール」なるものを議長が朗読します。それは、高山市の他の地域の人も知らなかったもので、うちの研究室の学生たちがそうした事例を見つけてきて、そこに入って調査を行いました。調査をした結果をフィードバックすると、地元の人たちは自分たちは当たり前だと思っていたことが実は貴重で大事なことだと気づき、少しずつ自分たちの集落を見る目が変わります。

そういうタウンミーティングが今でもしっかりと生きていくところは多くないので、私たち外部の人間は現場に行くと感動します。この万雑というのは、共有の財産に対して誰が文句を言う権利があるかということがベースにあり、つまり「^(※2)コモンズ」なのです。都市のコモンズというのは、非常に重要な新しい考え方だと言われていますが、もともとあったのです。そういうところに光を当てれば、元気も出てきます。

高井 そうすると、逆に都市部の方が難しいのでしょうか。



西村 都市部は、少し違うことをやらないといけないでしょうね。そのひとつがNPOですが、今後はSNSシステムの活用も考えられるかもしれません。

世界遺産登録への取り組みは、その“裾野”への視点を忘れないことが大事

高井 まちの魅力を輝かせるひとつの方向性として、昨今では各地における世界遺産登録への取り組みも活発ですね。現在、日本の世界遺産の暫定リストには鎌倉や彦根城、富岡製糸場などがあります。先生は日本におけるイコモス^(※3)の委員長もしておられますが、どのような取り組みが大事だとお考えでしょうか。

西村 今年、富士山が登録されましたが、単体ではなく「富士山—信仰の対象と芸術の源泉」として世界遺産登録された富士山の例が、ある意味、取り組みの好例だと思います。富士山というと、登ってご来光を見るといったことが常に脚光を浴びますが、それは富士山の魅力のほんの一面であって、浅間信仰や豊かな水など裾野にあるさまざまな幅広い文化が富士山の本当の魅力です。文化というのは、幅広い裾野があってこそ、その頂が高くなり優れたものとして認められるのです。まさ

(※2) 「コモンズ (commons)」は、近代以前のイギリスで牧草の管理を自治的に行ってきた制度として知られているもの。このような制度は、イギリスだけでなく世界各地で古くから行われており、日本でももともとは、「入会」「共有」という制度として機能してきたもの。

(※3) 世界遺産の中で文化遺産を選定する際の専門調査機関。国際遺跡記念物会議 (International Council on Monuments and Sites)

に私たちがまちづくりで行っているのはそういうことで、さまざまな裾野の魅力をどう発掘し、つなげていくかということです。

高井 ピンポイントでスポットライトを当てるのではなくということですか。

西村 核となるものにお金を投入するからまわりに使うお金がないというのは本末転倒です。世界遺産においても、ある一点だけがお墨付きをいただくことを目指すと、趣旨とズレると常々思っています。例えば、今、富岡製糸場が日本の次の世界遺産登録を目指して準備が進められていますが、単に製糸場の工場が立派だということではなく、あそこに養蚕の文化が根付き、それが農家の構造に変化をもたらし、農村の風景をも変えたことに大きな意味があります。養蚕農家では、他の日本の住宅と違い、養蚕を行うために2階や天井裏を大きくし、生活を変えていきました。今でもそこへ行くとそうした風景を感じられるのです。富岡製糸場の工場と田舎の養蚕農家の風景とをつなげて見なければ、本当の価値は見出せません。これもいわば、先ほどからお話している、その地域の物語を読み解くということです。

スリリングで面白いまち歩きを伝えていきたい

高井 最後に、日々忙しく日本全国を飛び回っておられる先生のリフレッシュ法とご自身の夢をお聞かせください。

西村 難しい質問ですね。リフレッシュになるようなことは全く何もしていないものですから。強いて言うなら、いちばん気分転換になるのは、仕事に絡んでしましますが、今までに行ったことのないまちを歩く時ですね。アジアのまちに行くことも多くて、そういったところを歩くといろいろと刺激を受けて心が躍ります。「まち歩きは本を読むようなものだ」とお話ししましたが、私にとってまちは本当に書物みたいに見えるのです。だから、いろいろな読み方ができます。人が住んでいるのだから、物語がないわけがないでしょう。ま

ちを読み解くというのは、非常にスリリングです。こちらがいろいろな引き出しを持っていれば持っているほど、読み方もどんどん多様になるのが面白いですね。

高井 今後、ご自身としてこういうことをやってみたいという夢はどうでしょうか。

西村 時間が欲しいですね。まだ行ってないところに行きたいし、まち歩きは本当にスリリングで面白いということを何かに残しておきたいと思うので。

高井 あくまで仕事と興味がリンクしていますね。私自身、今日のお話からまち歩きがスリリングで面白いということを十分感じ、さまざまな発見をさせていただいた時間でした。本当にありがとうございました。



Profile

西村 幸夫 (にしむら ゆきお)

1952年、福岡県福岡市生まれ

1977年、東京大学工学部都市工学科卒業、同大学院修了。

明治大学工学部建築学科助手、東京大学工学部都市工学科助教授を経て、1996年、同教授。2008年より同大学先端科学技術研究センター教授。2011年、東京大学副学長、2013年先端科学技術研究センター所長。この間アジア工科大学助教授、MIT客員研究員、コロンビア大学客員研究員、社会科学高等研究院客員教授（フランス）などを歴任。

専門は都市計画、都市保全計画、都市景観計画、市民主体のまちづくり。

●ひと口メモ

まち歩きとは本を読むようなもの……この言葉に納得でした。私も半年前まで番組企画で「まち歩き」をしていたからです。5年間で212の街を歩きました。何を見つけるか、誰に出会うか、台本なしの散歩です。最後に「あの街を歩いてみたい！」という後味が残るように、それこそ行間を読むように、街の特徴を探して歩きました。

なかでも印象深いのが、豊田市小渡町の「夢かけ風鈴」。小渡町は、豊田市といっても矢作川上流部の山また山に囲まれた、人口300人あまりの小さな町です。平成15年、町の自慢を探したところ、矢作川を吹き渡る「いい風」があることに気づきました。そして、その風を感じるものとして風鈴を選んだのです。実行委員会が呼びかけ、通りに面した100戸の軒先に風鈴が吊るされました。その数5,000個。小さな町に風鈴の音があふれました。その音は風だけでなく、川の流れや町を包みこむ自然の大きさまでも感じさせます。また風鈴に、盆踊りや昔から続くお祭りを融合させ、地域の新しい伝統を育てようとしています。

小渡町では「風鈴の町」をアピールしていますが、それで訪れる人が爆発的に増えるわけではありません。でも、町の人達は風鈴の音に心を癒され、豊かな自然を誇りに感じています。

小渡町を歩いて以来「まちづくり」のイメージが、外から人を呼ぶ企てよりも住む人が楽しめることこそ大切に変わりました。

先生のお話をうかがって、今度は自分が住む町の物語を探してみたくなりました。

（豊田市小渡町「夢かけ風鈴まつり」＝例年7月中旬から8月末まで）

.....

高井 一 (たかい はじめ)

東海テレビアナウンサー。1953年、京都府生まれ。同志社大学文学部新聞学科卒。1976年、東海テレビに入社。1997年、名古屋大学大学院多元数理科学研究科修了。現在、編成局アナウンス専門局長。

